



気づかないうちに助けられていた、町の優しさ

大阪府立水都国際中学校

2年

いいだ ともか
飯田 知花

グリコの看板・道頓堀・なんばグランド花月など、大阪市には定番の観光地が多くある。そんな多くの人が集まる大阪市の中でも、特に多くの人を利用する駅。駅は、観光客以外にも、年齢や能力、状況にかかわらず多くの人を利用する公共施設だ。そこで、多くの人を訪れる「駅」にはどのようなデザインが施されているのか、普段から利用者の多いOsaka Metro なんば駅を調査した。

駅構内は、夏休み中であつたことも相まって多くの人でにぎわっていた。そのような状況の中で目立ったのは、南海なんば駅乗り換えルートの通路の大半を占めるバリアフリーなスロープだ。もともとバリアフリーとは、障がい者の方を含む高齢者を対象に、生活をする上での物理的な障がいや、先進的な障壁を取り除く施策、または具体的に障がいを取り除いた状態のことを指す言葉である。日本では、2006年にバリアフリー法が制定されており、他の国と比べてもかなりバリアフリー化が進んでいるようだ。Osaka Metroでも、2000年代頃からバリアフリー化が進められている。調べたところ、このスロープは2020年に新しく設置されたものなのだそうで、「バリアフリールート」と名付けられ多くの人を利用している。

しかし、このバリアフリールートに助けられていたのは、障がいを持つ人、高齢の人だけではなかったようだ。キャリーケースなどの大きな荷物を持った観光客や、ベビーカーを押した子ども連れの家族などが利用していたのだ。このように、スロープによって多くの人で自分でも気づかないうちに、快適に移動を行えるようになってきていることから、スロープは素晴らしい「街の優しさ」だと思った。

私は今回調査をして、このようなスロープが障がい者や高齢者以外にも、多くの人を助けられていることを知った。一方で、こんなに便利そうにしているのにもかかわらず、キャリーケースを持つ観光客のためのデザインや、ベビーカーを押すお父さん・お母さんのためのデザインは、まだ見たことがないと感じた。今回は、キャリーケース・ベビーカーの例にしか気づくことができなかったが、他にもこのように「スポットライトには当てられないが困っている人たち」はたくさんいるのではないだろうか。様々な公共交通機関のバリアフリー化が進んでいる今、このように今はまだスポットライトに当てられていない人のためにデザインをすることで、本当に優しい街づくりができるのではないかと考える。



写真1



写真2